

本 誌は、建設全般に関わる諸氏をはじめとして、広く一般の皆さんを読者として想定しているので、本文が筆者の専門とする土木工学に傾倒していることを、まずはご容赦いただきたい。

公益社団法人土木学会が、昨年十一月二十一日に東京都内で創立一〇〇周年記念式典を開催した。式典は、皇太子殿下のご臨席を賜り、国内の関連省庁をはじめ、海外の関係機関からも多くのご出席者を迎えた中で、磯田雅彦・第一〇二代会長から、一九一四（大正三）年に創設されて以来の土木学会の様々な活動に対する総括とともに、これからの土木工学の進むべき方向として「土木学会創立一〇〇周年宣言」が謳われた。

磯田会長の演説では、初代会長である古市公威の会長就任時の演説内容が取り上げられ、あらゆる分野に遠心し発展した工学は、土木のよきな総合力をもって求心する、すなわち「遠心力と求心力の調和均衡」こそが、我が国の発展の礎となり、それを担うのが土木技術者であるからこそ、土木技術者は「将の将」たる技術者でなければならぬことを改めて私たちに知らしめた。

また、「一〇〇年宣言」の本文には、過去一〇〇年に対する理解とともに、今日の土木の置かれた立場を俯瞰し、持続可能な社会実現に向けた今後目指すべき社会と土木の方向性、目標と

各 人 各 説

「将の将」たる土木技術者として

東北大学大学院 工学研究科 教授、インフラマネジメント研究センター長

久田 真

Makoto Hisada



する社会の実現化方策、土木技術者ならびに土木学会の役割などが明瞭に示されている。この中で、今日の土木の置かれている立場として、東日本大震災の津波被害と福島第一原子力発電所事故の惨禍による衝撃を未だ拭い去れていないものの、社会における重責を理解し、社会における信頼を一層高め、社会に貢献することに、例外なく取り組む覚悟を持つことが記されている。

東日本大震災の被災地である仙台に身を置く者として、このような土木技術者としての覚悟は、いつそう、身が引き締まるものがある。震災以来の迅速な道路啓開をはじめ、被災者救助と並行して実施された災害廃棄物（がれき）の撤去、最大限の利活用を目指した災害廃棄物の処理、一刻も早い復興へ向けた災害復旧工事、今後の震災が予想される首都直下あるいは南海トラフ地震への備えなど、我が国の土木技術者が果たした役割は極めて大きい。

さらに、二〇一二年十二月の笹子トンネルの崩落事故を契機として、インフラの老朽化対策が大きな社会的課題になっており、これについても適切な対処が求められている状況にある。土木学会が一〇〇年を迎えたのと呼応するように、土木技術者にはこれまで以上に総合力が要求され、果たすべき役割は、ますます重要になってきているのである。

志のある諸君よ！是非とも、土木の世界へ！